

ロンボク島の都市・集落・住居とコスモロジー (2)

布野 修司

—イスラーム世界の都市・集落・住居の形態とその構成原理に関する比較研究—

はじめに

1) 研究の目的

本研究の目的は、報告(1) (住宅総合研究財団『研究年報』No.19 1992年度)に示す通りである。空間の形態とそれを規定するコスモロジーとの関係を視点に、都市・住居・集落の構成原理を考察することを目的とする。すなわち、都市や住居集落の構成原理にかかわる宇宙観・思想・理念を問題とし、その具体的な表象、フィジカルな形態や様々な形象のあり方をテーマとする。具体的に焦点を当てるのは、インドネシアのロンボクLombok島である。

ロンボク島は様々な意味で興味深い島である。知られるように、ロンボク島と西に隣接するバリ島との間にはウォーレス線が通る。動植物の生態はその東西でがらりと変わるのである。また、宗教の面でも特異である。イスラームが支配的なインドネシアでバリ島だけはヒンドゥー教が信仰されている。ロンボク島はイスラーム化されているのであるが、バリ島に近接するその西部にはヒンドゥー教の強い影響が残されている。同じ小さな島なのにイスラームの影響とヒンドゥーの影響の両方をみることができるのである。

住居のあり方についてもロンボク島は興味深い。高床式住居が支配的な東南アジアの島嶼部^{とうしょ}で、ジャワ・バリ・ロンボクは地床式である (他にブル島がある)。一方、ロンボク島には、スンバワ人・ブギス人の高床式住居も見られ、2つの文化の境界域でもある。

さらに、おそらく本研究が初めて本格的に焦点を当てるチャクラヌガラ^{チャクラヌガラ}の存在がある。18世紀にバリのカラングサム王国の植民都市として建設されたチャクラヌガラは、インド文明の東端^{とうしやう}にあって、すなわち、ヒンドゥー文化の最周縁にあって、その理念を最も忠実に実現しようとした都市なのである。

2) 研究の経緯

第1次ロンボク島調査 (1991年12月6日～12月24日 調査メンバー 応地利明、坂本 勉、金坂清則、布野修司、佐藤浩司、Josef Prijotomo、脇田祥尚、牧 紀男) については報告(1)に示す通りである。その後、第2次から第4次まで調査を行った。その概要は以下の通りである。

第2次ロンボク島調査 (1992年9月6日～10月3日 調査メンバー：布野、牧、脇田、松井宣明、青井哲人、堀喜幸、神吉優美)：○チャクラヌガラ調査：現地研究者や古老への都市史に関するヒヤリング調査。宅地割り寸法および住区構成、住み分けの構造に関するフィールド調査。○集落調査：住居・集落形式の類型に関する全島調査。デサ・バヤンを中心とする住居・集落の空間構成に関する調査。

第3次ロンボク島調査 (1993年11月24日～1994年1月20日 調査メンバー：応地、牧、脇田、吉井康純、山本直彦)：○チャクラヌガラ調査：コミュニティ組織に関する調査。宅地割り調査。一部カースト調査。○集落調査：住居集落の地域類型調査。デサ・バヤンに関する約1か月間の住み込み調査。住居の空間構成、建物の所有形態、ブルガの利用状況等。

第4次ロンボク島調査 (1994年5月2日～5月18日 調査メンバー：布野、応地)：○チャクラヌガラ調査：各住戸の民族・宗教・カーストに関する^{しつかい}悉皆調査。

1. ロンボク島の住居集落

ロンボク島には、原住民であるササク族をはじめとして、バリ人、スンバワ人などが混住しており、それぞれ独自の居住様式をとっている¹⁾。既往の研究²⁾をもとに、また、インドネシア現地研究者の示唆をもとに、ロンボク島全域を可能な限り踏査し、典型的なササク族の伝統的住居集落を選定し調査した。選定したのは、ガンガGangga (1)、レンペグRempeg (2)、スゲンタールSegenter (3)、バヤンBayan (4)、スナルSenaru (5) (行政単位としてはデサ・バヤンに含まれる)、ロロアンLoloan (6)、サジャンSajan (7)、サピットSapit (8)、レネックLenek (9)、バトゥ・リントランBatu Rintang (10)、サデSade (11)、ルンビタンRembitan (12)、スンコルSengkol (13)の13集落である (図1-1 番号は図中の番号)。

1.1 住居集落の地域類型

1.1.1 住居、ブルガ、穀倉

ロンボク島の一般的住居は、ジャワ・バリと同様、地床式住居である。地床式住居は大きく2つに分けられる (図1-2)。1つはバヤンを中心とした地域一帯に見られる

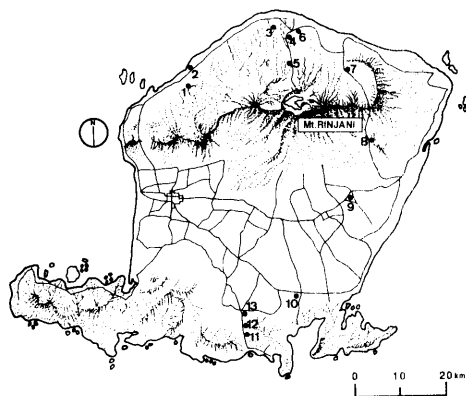


図1-1 ロンボク島の伝統的集落地図

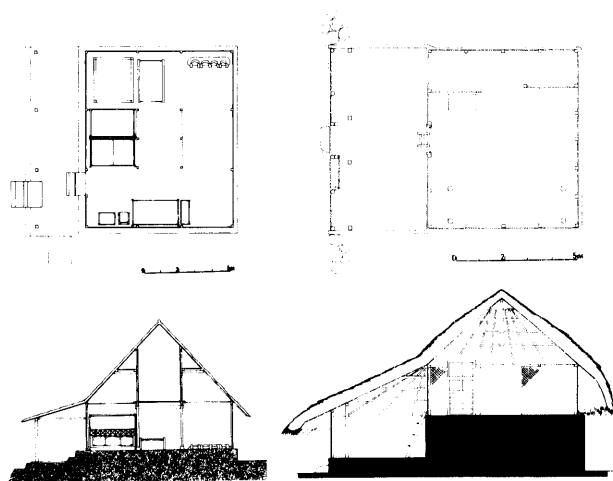


図1-2 地床式住居（左）と高床式住居（右）

バレ・ブレ bale belek と呼ばれる住居である。スゲンター、スナル、ロロアンにおいても見られる。6本柱の高床の倉庫、イナン・バレ inan bale が住居内に存在するのが特徴である。イナン・バレには、壺などの貴重品、にんにくなどの根菜類などが貯蔵されている。住居内には間仕切りはなく、ベッド、かまど、家具などが置かれる。

もう1つはサデを中心にロンボク島各地に見られる住居である。1.0~1.5mの土壇上に築かれるのが特徴である。住居前部には、サンコ sankoh (テラス) があり、セミ・パブリックな空間として使用されている。女性による機織り仕事や談笑の行われる空間である。住居内はプライベートな生活空間として使われる。炊事、就寝のためのスペースである。一般にかまどは奥を背にして左側に配置される。ベッドはなく、草を編んで作ったござを敷いて寝床を作る。

サンコと同様、セミ・パブリックな空間として機能する建物にブルガ berugak がある。ブルガはバヤン、スゲンター、スナル、ロロアンといったバヤンを中心とする地域に見られる。ブルガは住居とセットになって、生活空間を形づくる。ブルガは6本の柱を持つ高床式の壁

のない建物である。バヤン地域外では、集落全体に数棟しか見られない。機能的には、集会所や儀礼場として用いられ、パブリックな色合いが強くなる。

建物の棟木はすべて聖山であるリンジャニ山の方角を向く。例えば、バヤンから見てリンジャニ山は南側に位置するので、棟の方向はすべて南北方向を向く。周囲の他の集落でも同様な傾向がみられる。東ロンボクでは、住居はほぼ東西方向に配置される。ロンボク島では聖山であるリンジャニ山が方位観を大きく規定する要因となっているのである³⁾。

穀倉は、モンジェン monjeng, サンビ sambi, ゲレン geleng, アラン alang の4種類が区別される(図1-3)。サンビはロンボク島全般で見られる。4本と6本という柱数の違いはあるが、イナン・バレと全く同一の構法によって建てられる。素朴な構法といていい。モンジェンは最も規模が小さく、住居のテラスあるいはブルガの脇に配置される。日常に使用する米を貯蔵しておくためのものである。バヤンに数多い。それに対しゲレンは最も規模が大きい。住居と同じ大きさのものも見られる。倉の部分とそれを支える柱の部分が分かれ、ネズミ返しを持つ。柱の持つ膨らみが特徴的である。アランは釣り鐘型の特異な形態を持つ。ロンボク島のアイデンティティーを表現するものとして、その屋根形態が象徴的に用いられる。倉の部分と柱の部分が分離しているという点ではゲレンと同様である。

ゲレンとアランについては、その分布に関して明確に地域的な違いがみられる。ゲレンはロンボク島北部・東部に見られる穀倉形態であり、アランは主に南部を中心

1.1.2 集落形式

諸集落は、大きく3つに分けられる(図1-4)。

①住居とブルガが平行に配列されるパターン

②住居と穀倉が平行に配列されるパターン

③住居が丘陵の等高線に従って配置されるパターン

バヤン、スゲンター、スナル、ロロアンは①のパターンをとる。住居がブルガを両側から挟み込む形で、それぞれ平行に並べられる。1つのブルガは、1世帯あるいは2世帯によって所有される。

穀倉の配置には、それぞれ特徴がみられる。バヤンの場合、穀倉はまとめて集落の周縁部に配置される。スナル、ロロアンの場合は、住居・ブルガと同様平行に配置される。スナルの場合、集落の内部にも穀倉が配置されるのに対し、ロロアンは集落の端の部分にのみ配置される。スゲンターには独立した穀倉は見られない。住居内に貯蔵するのが一般的である。

②のパターンが見られるのは、サジャン、スンバルン、サピット、レネックなど盆地の北東部から東部にかけての諸集落である。これらの集落では、居住様式の変化がかな

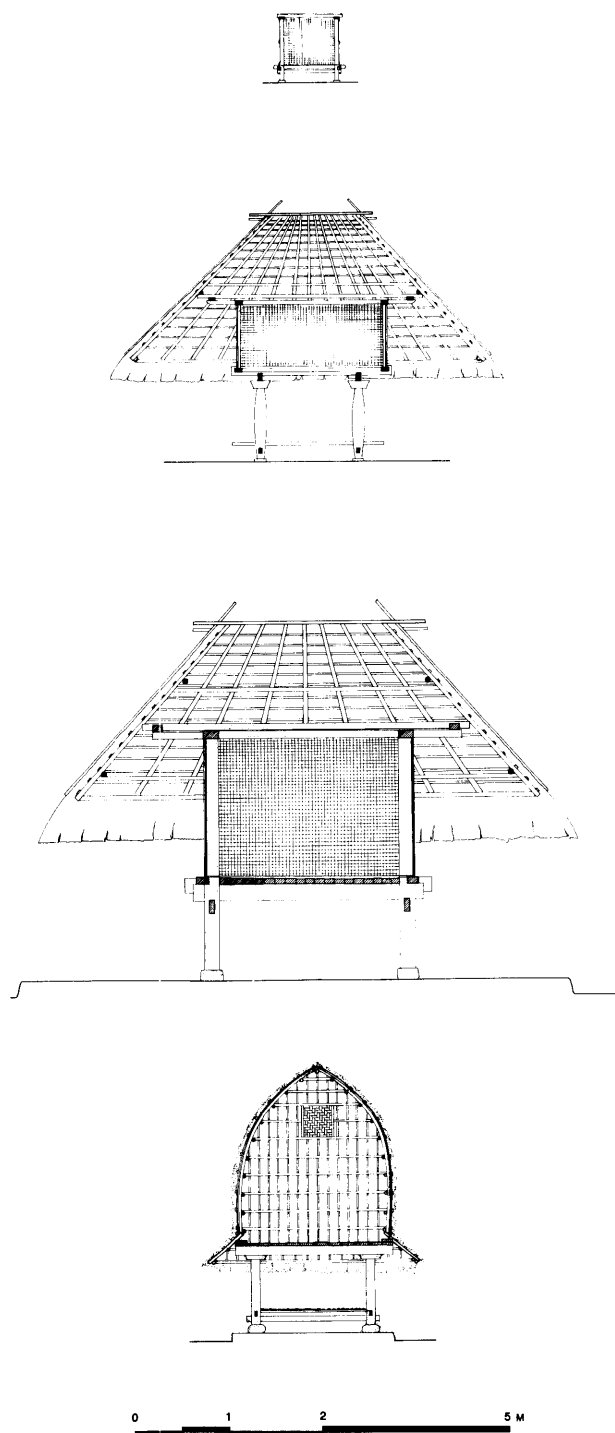


図1-3 穀倉断面図
(上からモンジェン、サンビ、ゲレン、アラン)

りみられる。ほとんどの穀倉は、その床下部分が居住部分にあてられている。穀倉の周囲を壁で囲い、内部に炉をきり、床下に露台を設置しそこで寝起きするのである。

それに対し、南部に位置するサデ・ルンビタン・スンコルでは丘陵地に集落が築かれている。乾燥地帯であるロンボク島南部において耕作の可能な土地は貴重であり、耕作の不可能な丘陵に居住するのが望ましいと考えられ

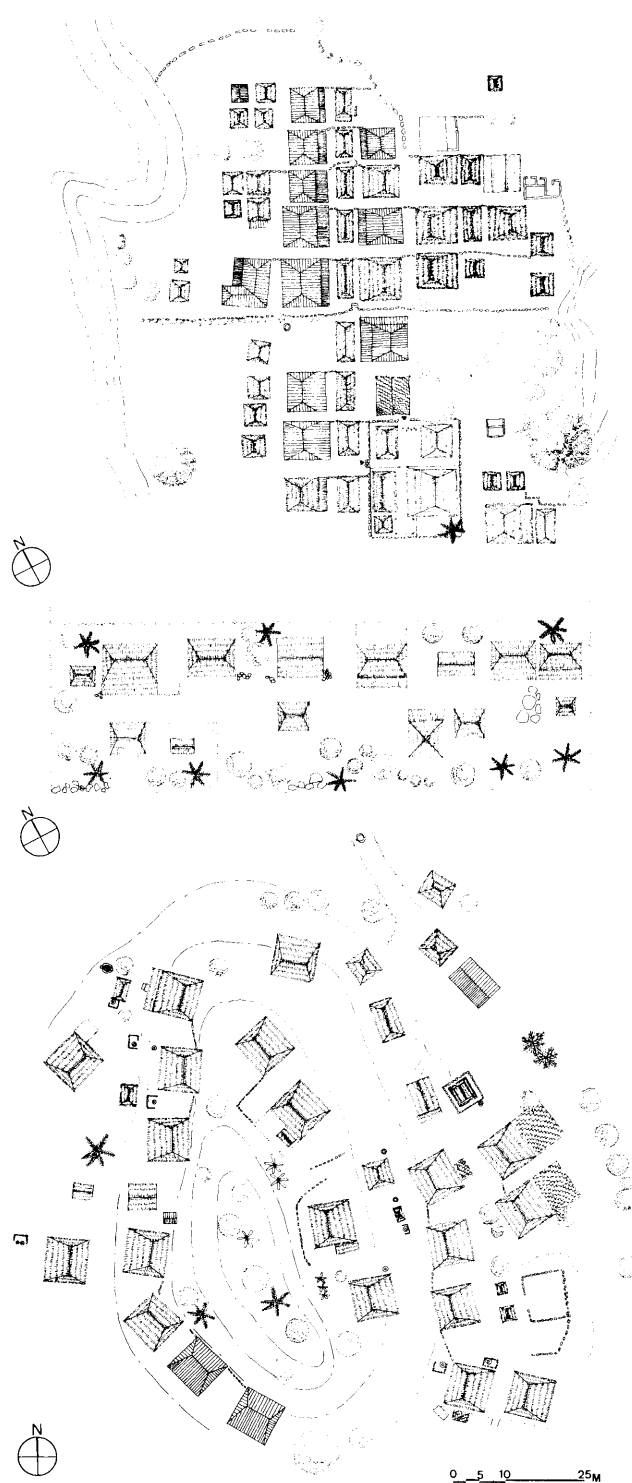


図1-4 集落形式の3パターン
(上からバヤン、サジャン、サデ)

ているのである。配列は非常に特徴的で、丘陵の等高線に沿って住居が配置される。

この①②③のパターンは、それぞれ地域的な類型になっている。また、建築形式も地域ごとにまとまっている。すなわち、ロンボク島北部では、イナン・バレを持つ住居の存在、建築物の平行配置、住居とブルガの対応関係、カンブ kampu⁴⁾の存在が、その特徴となる。それに対

し、ロンボク島北東部・東部では、住居と穀倉の平行配列が、その特徴となる。ロンボク島南部では、住居が等高線に沿って丘陵上に配置されるパターン、またアランの存在が、その特徴となる。

1.2 デサ・バヤンの空間構造とその構成原理

デサ・バヤンは、ロンボク島北部、リンジャンニ山の北側斜面に位置する。ワクトゥ・テル⁵¹ 発祥の地として知られ、現在でも独特の信仰を保持している、稲作を中心とした農村集落である。集落規模は周囲の集落に比べかなり大きく、中心部には150世帯ほどの人々が居住している。

デサ・バヤンは現在行政上11のドゥスン dusun (住区)によって構成されている。バヤンの文化圏は行政上の枠とは異なったレベルで広がっているのであるが、その中心は、現在村役場の置かれているバヤン・ティモール(東バヤン)およびバヤン・バラット(西バヤン)である。この東西バヤンについては、キャンプの存在、17世紀に建てられたといわれる木造のモスク、ムスジッド・クノ・バヤン・ブレ Mesjid Kuno Bayan Beleq の存在、マカム・スカダナ、マカム・アニャールといった他集落の名が付けられた墓の存在、ラデン Raden と呼ばれる貴族の存在など、その中心性を特徴づける様々な特性を挙げることができる。

1.2.1 バヤン・ティモールのグブック・テンガの構成

バヤン・ティモールは8つのRT (Rukun Tetangga = 隣組)⁶¹によって構成される。グブック・テンガ Gubuk Tengah が、その中心RTである。その一画に、祭祀集団の長およびその家族の居住するキャンプがあり、集落の祭祀の際に中心的役割を果たす。祭祀集団の長はプマンク pemangku と呼ばれる。バヤン・ティモールの全戸数208戸(1992年)のうち、グブック・テンガには30戸が住む(図1-5)。

グブック・テンガは集落内を走る歩道によって境界づけられる。そのほとんどは整然と並ぶ住居とブルガによって占められ、キャンプは北端中央に位置する。東端には、共同の便所兼水浴び場がある。このRTの東側には水路がその境界に沿って走っており、食器の洗浄や衣服の洗濯が行われている。

キャンプは竹製の壁で4つに分割されている。集落外からこのキャンプに入る場合、まずブンチンガ Bencingah と呼ばれる4つのブルガの置かれている一画を通らなければならない。これら4つのブルガの形態はいずれも同じであるが、それぞれ異なった機能、ヒエラルキーを持つ。最も重要視されているのはブルガ・アグン berugak Agung と呼ばれるブルガであり、重要な祭祀の時にはこのブルガが中心となる。次はブルガ・マラン berugak Malang と呼ばれるブルガであり、このブルガは祭祀時に盛大な食事の場となる。他の2つは待合所や集会所と

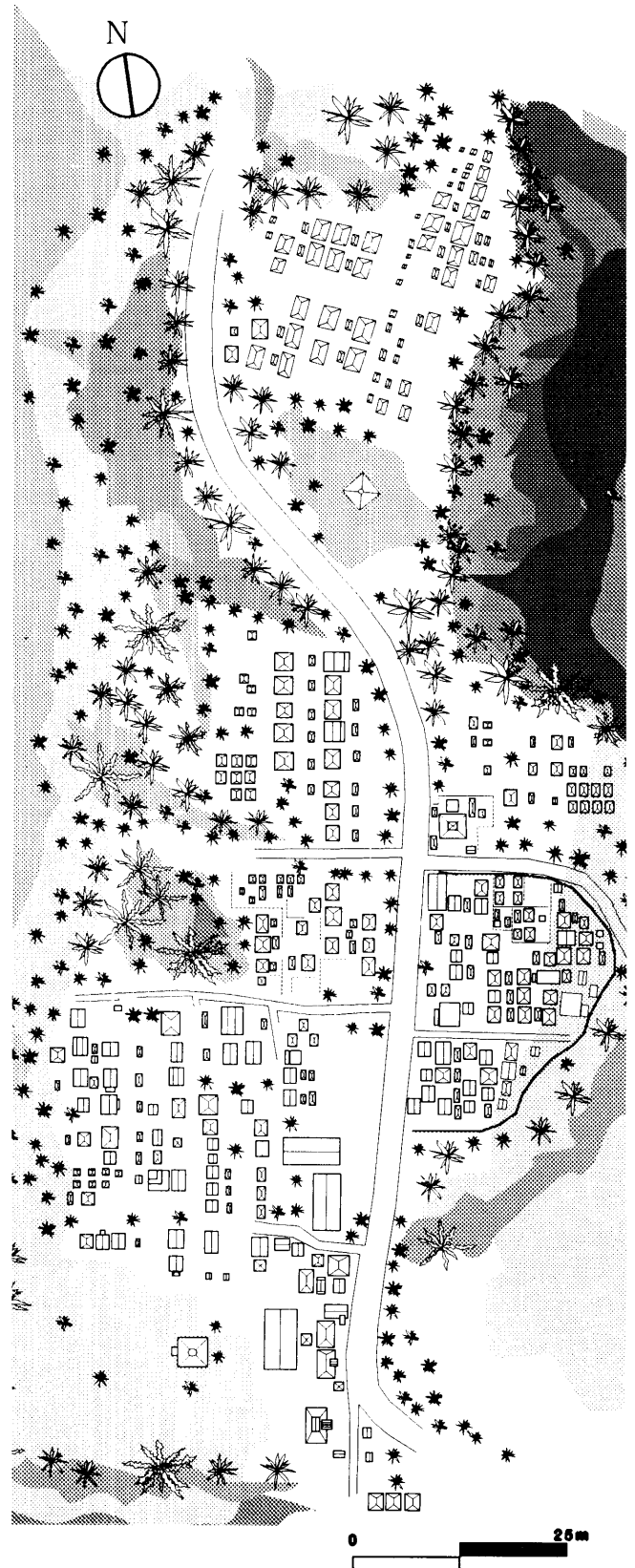


図1-5 グブック・テンガ配置図

して使用されたり、食事の準備に使用されたりする。これらのブルガは、ブルガ・スンバゲ berugak Sembagek、ブルガ・ジャンガン berugak Jangan と呼ばれている。

南西の一画には3つの建物が見られる。1つはサント

レン Santren と呼ばれる建物で、結婚式の最後の儀式が行われる。さらに^{かまや}釜屋がある。木造寄棟の建築物で、祭祀時に参加者が食す食物を調理するために使用される。祭祀時以外には使用することができない。また、中に入ることも許されない。あと一つはブルガで、この建築物は先述のブルガ・マランにおいて行われる食物を一時的に置いておくために使用される。日常生活に用いるのは西側の建物である。南東の一角はキャンプの中心となる場所である。ここにはその昔バヤンの王が住んでいたとされる住居が残っている。現在は空き家^{だれ}で誰も住んでいないが、内部には剣などの貴重品が数多く収納されている。

1.2.2 住居の空間構成

もともとデサ・バヤンの伝統的住居といえばイナン・バレを持ったバレであった。また、バレとブルガとは密接な関係を持つ。ブルガを男の空間、バレを女の空間と呼ぶこともある⁷⁾。右・左、内・外が男・女に結びつけて考えられている二項対立の原理、つまり双分観が、バレに対する空間認識に大きく影響を及ぼしていると考えられる。

バレは、基本的にイナン・バレを中心とし、3つの部分に分けられ使用される(図1-6)。奥を背にして右側には、かまどが配置され、炊事・食事の空間となる。瓶や稲なども置かれている。左側は、奥と手前に分かれてはいるが、ベッドが置かれ就寝の空間として機能する。イナン・バレの周囲には、戸棚・机・椅子などが置かれる。しかし、現在グブック・テンガに見られる住居のほとんどは、バレのような1室空間ではなく、多室空間である。住居の増築・改築が繰り返し行われ、イナン・バレを持つものは数少ない。全住棟数45棟のうち、建設中のもの4棟、空き家3棟を除くと、イナン・バレを持つものはわずか7棟である。住居としては機能していないが、その他にキャンプ内に2棟バレがある。1つは炊事場として、もう1つは祭祀の家として機能している。以上の9棟のうち1棟は、イナン・バレを持つが、屋根は瓦葺、壁は煉瓦にモルタル塗、土台はコンクリートというように、外見は全く伝統的なものと異なっている。

現在のグブック・テンガの住居のうち、最も一般的に見られる平面形式はタイプ (TYPE A3) である(図1-7)。平入りでまずL字型の居間にアプローチし、その両側に寝室が並べられる。机や椅子は、表に面した位置に配置される。入口部分にテラスが設けられ、その右部分に寝室が付設される。次に多いのが、非常に簡素な2室住居 (TYPE B1) である。入口は左側の部屋に設けられ、右側の部屋は寝室として機能する。この形式の住居には切妻屋根を持つものが多く、規模もかなり小さい。その他 TYPE B1の寝室部分が分化した (TYPE B2) や、TYPE A3に見られる三分構成の原型と考えられる (TYPE A1) や (TYPE A2) などのタイプも見られる。

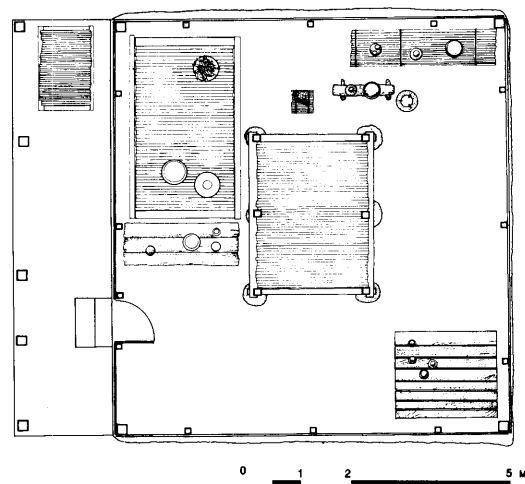
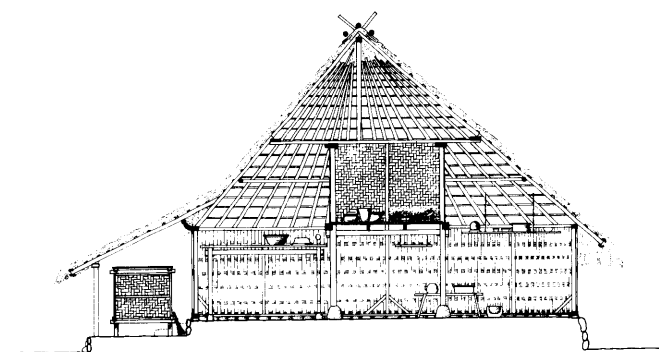


図1-6 イナン・バレ断面・平面図

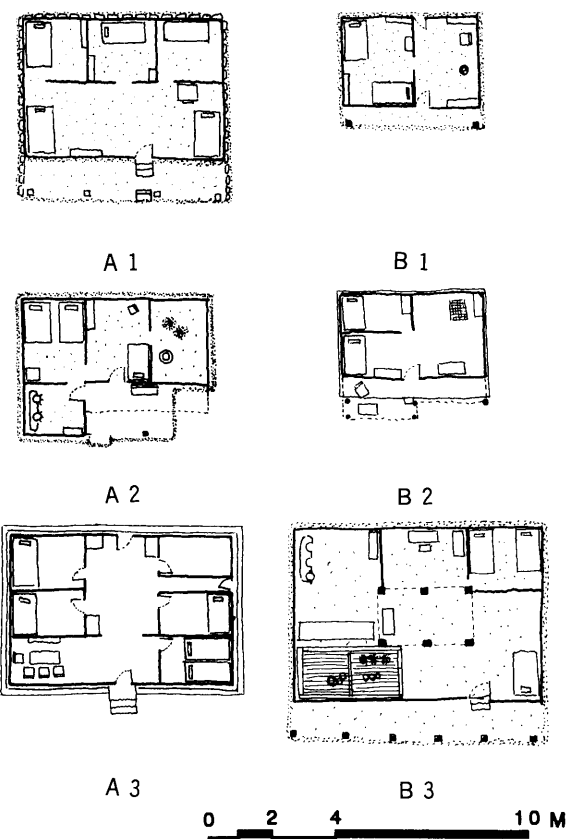


図1-7 デサ・バヤンの住居の類型

sanga, マルガ・ダサ marga dasa, マルガ marga と呼ばれている⁹⁾。サンガは9を¹⁰⁾, ダサは10を意味する。マルガ・サンガはチャクラヌガラ^{つじ}の中心で交わる大通りである¹¹⁾。このマルガ・サンガは正確に東から西・北から南に走り、四つ辻を形成する。そして、マルガ・ダサが各住区を区画する通りであり、マルガが各住区の中を走る通りである。

宅地1筆あたりの計画寸法および道路幅の計画寸法について、古い壁の残っている宅地を選んで実測を行った。計測した宅地の東西方向の平均は26.5m, 最大は30.44m, 最小は25.08m, また、南北方向は平均24.53m, 最大は26.84m, 最小は21.55mであった。宅地の計画寸法は東西約26m, 南北約24m, 1宅地あたりの面積は約624m²となる。

古老によれば¹²⁾, 「プカランガン(屋敷地)の計画寸法は10×10トンバ(25m×25m)であり、宅地を測る単位としてトンバtombaがある。トンバは檜^{やうり}の長さであり約2.5m, 25mというのはその10倍である。」。また, 「1プカランガンは8アレ are(800m²)であり、正方形である。」という¹³⁾。「1プカランガンは6 are(600m²)である。」¹⁴⁾と異説があるが、実測では25m×25mの正方形のプカランガン(屋敷地)は存在せず、当初からほぼ26m×24mで計画されたものと考えられる。

街路の幅は、タクタガン tagtagan の幅も含めて計測した。タクタガンとは、街路の両端に設けられた植栽スペースである¹⁵⁾。古老たちによれば, 「テンボック tembok(壁)と道の間には、タクタガンと呼ばれる植栽空間がある。その所有権は王に属する。」¹⁶⁾。「タクタガンの幅は約5mであった。タクタガンの機能の1つとしては、ウパチャラ upacara(祭り)に使う。また別の機能としては、ココナッツや砂糖椰子などの果樹を植え果実を収穫した。タクタガンはアダット(慣習法)では、プカランガン(屋敷地)に属しており、プカランガンの中では儀式を行うのを禁じた。1867~68年にかけて中国人がタクタガンを商業地として買い上げた。」¹⁷⁾。

タクタガンは祭祠の行われる場所であり、また植栽が行われ都市景観を演出する祝祭空間として、かつては利用された。しかし、現状では、マルガ・サンガ沿いのタクタガンはほとんどが中国人所有の商店として利用され、マルガ・ダサやマルガ沿いのタクタガンも宅地に取り込まれている例が多く見られる。

実測によるとマルガ・サンガは東西の通りで幅36.52m, 南北の通りで44.05m, マルガ・ダサは、ややばらつきがあるが平均17.14m, 最頻値で18mであり、約18mで計画されたものと考えられる。マルガは平均で幅7.75mであり、約8mで計画されたものと考えられる。また、タクタガンの寸法は、マルガ・サンガで11.63m, マルガ・ダサで4~6mであった。これらの数値によると、マルガ・ダサで4方を囲まれたブロックの東西寸法は、宅地寸法(東西)26m×8+小路(marga)8m×3=232m。南北

寸法は、宅地寸法(南北)24m×10=240mになる。また、タクタガンの寸法を4mとしてブロックの寸法に含めると、興味深いことに、232m+4m×2=240mとなり、1ブロックの寸法は240m×240mの正方形となる。

2.1.2 住区構成——カラン

寸法計画の面からは、マルガ・ダサで周囲を囲まれたブロックが1つの住区単位を構成していたと考えられる。また、現在のカランの構成パターンもマルガ・ダサを境界とするものがあり、マルガ・ダサで囲まれたブロックが1つの住区単位となっていたと考えられる。

古老の話によると¹⁸⁾, 南北に走る1本のマルガに10ずつの宅地が向き合うのが基本である。そして、この両側町をマルガと呼び、2つのマルガで1クリアンを構成する。クリアンとは、バリではバンジャールの長を意味する。また、2クリアン、すなわち80宅地で1つのカランを形成するという。

現在、カランはインドネシアの行政組織においてはR W (Rukun Warga=町内会)¹⁹⁾に対応する組織となっている。古老の話によると「建設当初、各カランはバリの同一集落出身の人々で構成されていた。また、チャクラヌガラは33のカランからなり、各カランに1つのプラがあり、チャクラヌガラの中心寺院であるプラ・メル pura・meruにそれに対応する祠があった。そして、各カランごとに長がいた」ということである²⁰⁾。カランはかつては祭祀組織の単位であったと考えられる。

バリ島にはカランと呼ばれる住区は見られない。バリでカランとは、スードラの屋敷地の意味である²¹⁾。ピジョー T.G.Pigeaud²²⁾によると、カラン(karang)という語は、チャクラヌガラの王宮で発見された『ナガラ・クルタガマ』²³⁾の12章「(王家と宗教コミュニティに属する)領土一覧」の76編6節に見られる「kalagyans」に起源を持つという。「1. 今、描写されていないのは kalagyans (職人の場所) のことである。ジャワのすべてのデサ deshas(村 地域)に広がっている。」という描写がある。

バリの居住単位はバンジャールと呼ばれている。バンジャールは形式的には集団の単位であり、公共施設の管理、地域の治安維持、民事紛争の解決を行う。そして、その長はクリアン・バンジャールと呼ばれた。

現在、チャクラヌガラのバリ人の間ではバンジャールもカランも使われるが、バンジャールが社会組織の単位であるのに対して、カランは土地の単位を意味する。同じ土地出身の地縁集団としての性格を併せ持つのがカランである。

2.1.3 祭祀施設と住区構成

チャクラヌガラの中心に位置するプラ・メルには33の祠があるが、それに対応する33のプラが現在も残っている。プラを持たないカランも見られ、カランとプラの対応関係は崩れている(図2-2)が、かつての姿を推察

をクルラハン(地区)ごとにみると、格子状の町割りに含まれるクチャマタンは西チャクラヌガラ (Cakranegara Barat), 東チャクラヌガラ (C. Timur), 北チャクラヌガラ (C. Utara), 南チャクラヌガラ (C. Selatan) の4つに、ヒンドゥー教徒が数多く居住する(表2-1)。

各クルラハンごとに宗教別のカラン数をみると、西チャクラヌガラ、東チャクラヌガラでは75%以上がヒンドゥー教徒が主流を占めるカラン、北チャクラヌガラ、南チャクラヌガラでも50%以上がヒンドゥー教徒のカランとなっている(表2-2)。

具体的な住民分布を見てみると、まずムスリム(イスラーム教徒)について著しい特徴を指摘できる。ムスリムの居住するのは市の周辺部である(図2-3)。西側については、ほぼマルガで囲われるブロックの境界に沿ってムスリムが居住する。バンジャール・パンデ・ウタラの西の1クリアンはムスリムが居住し、バンジャール・パンデ・スラタンの西にはヒンドゥー教徒が居住する。チャクラヌガラのかつての境界はバンジャール・パンデ・ウタラの西であったことが推測される。カラン・サンパランの北は後にムスリムの居住が行われた地区であろう。南は、アビアントゥボの周囲がムスリム居住区である。そして、カラン・ゲタップが製鉄で知られるムスリム居住区である。

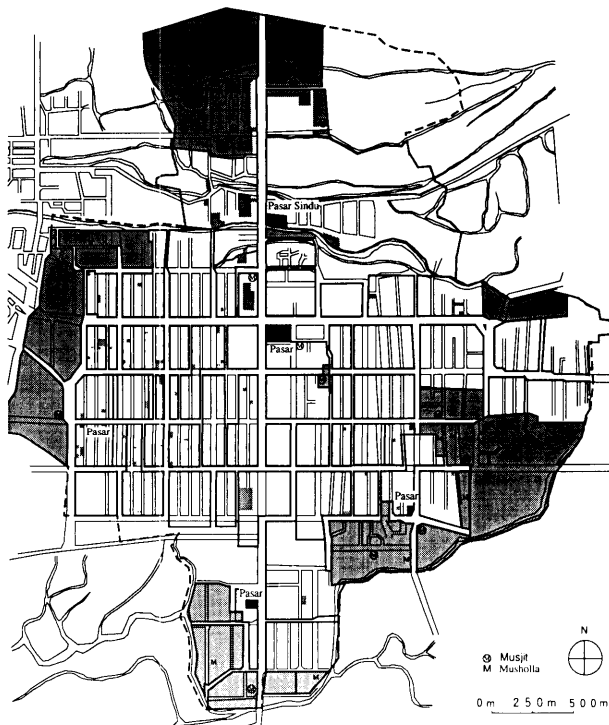


図2-3 ムスリム居住地域の分布

カラン・ゲタップは、低所得者層が居住する地区でもある。東のデサ・スガンテンは、4つのカランに分けられるが、いずれもムスリム居住区である。グリッド・パターンは左京(マルガ・サンガの東を左京、西を右京と便宜的に呼ぶ)でより崩れていることが、こうしたムスリム居住区

の分布で理解できる。北についても周辺部にムスリムが居住する。ヒンドゥー教徒の居住区をイスラーム教徒が取り囲んでいる形である。都心部でムスリムが居住するのはカンボン・ジャワとカラン・ブディルの極く一部である。

中国人は、全域に点々として分布している(図2-4)。まず、商業地域であるチャクラヌガラの中心部、四つ辻のあるあたりに集住している。金を扱う商店が中心部に多く見られるが、その経営者のほとんどは中国人である。また、幹線道路沿いに中国人は居住する。主として商業活動に従事するのが中国人である。

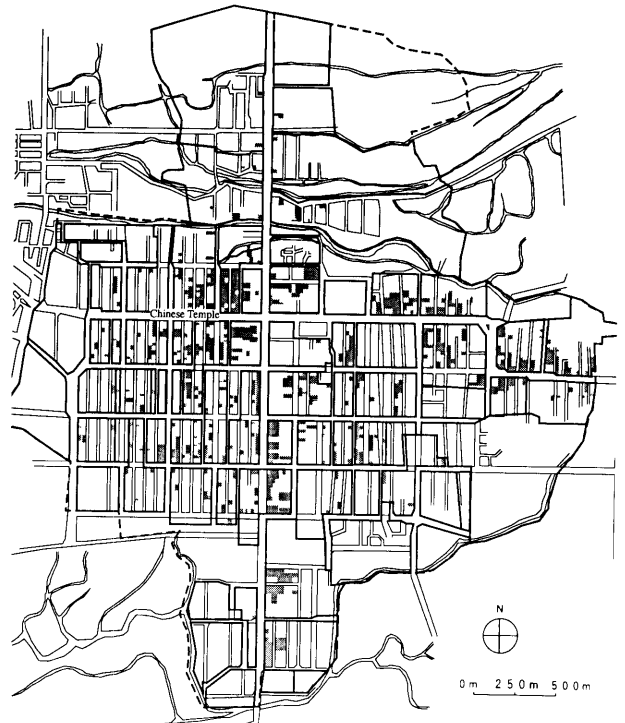


図2-4 中国人居住区の分布

2.2.2 住区構成と施設分布

まず、カランとブロックの関係をみてみると図のようである(図2-5)。マルガ、すなわち約20戸を単位とするが、マルガ・ダサを越えて様々な形態と規模をとる。

モスク、プラといった宗教施設や商業施設等都市施設の分布と、各カランの構成から住区構成を見てみると以下ようになる。モスク、プラの分布は、イスラーム教徒とヒンドゥー教徒の分布にかかわる。モスクは、上述したムスリムの分布と一致する。また、市の中心部に3つ建設されている。他の宗教施設として、キリスト教会が3つ、そして中国(仏教)寺院が1つある。

パサール(市場)は、中心部のほか、およそ東西南北に1つづ5つあり、生鮮食料品など日常品を販売している。商業施設は、マルガ・サンガの大通りに集中している(図2-6)。

近隣住区に密接にかかわる学校は各住区ごとに、いくつかのカランごとに設けられている。

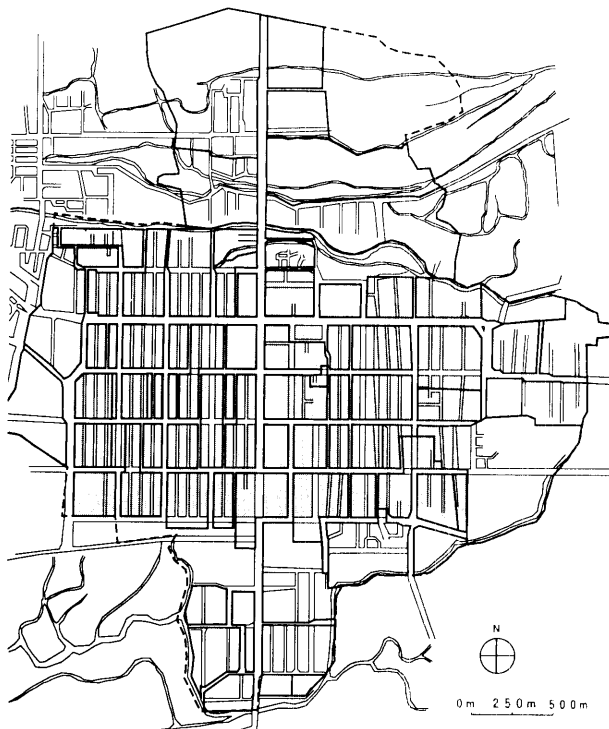


図2-5 カラン・ブロック対応図

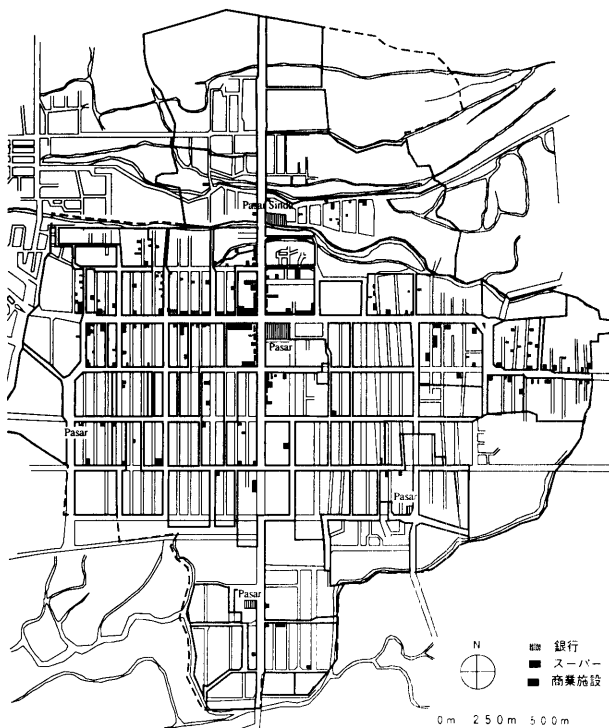


図2-6 商業施設の分布

2.2.3 住み分けの構図

1) カーストの分布

ヒンドゥー教徒の分布をカースト別にみてみよう。インドの場合と同様、バリでも、ブラーマナ Brahmana, クシャトリア Ksatriya, ウェシャ Wesya, スードラ Sudra の4つのカーストが区別される。さらに、ワルナ

Waruna (色) 制に似た下位分類を持つとされる。

ブラーマナの場合、男はイダ・バグース Ida Bagus, 女はイダ・アユ Ida Ayu, 略して Dayu と呼ばれる。もし、母親が父親より低いカーストに属すると、子供はグスティ Gusti ないしグスティ・バグース Gusti Bagus (女性の場合、イダ・マデ Ida Made もしくはイダ・プトゥ Ida Putu) と呼ばれる。クシャトリアは、極めて複雑になるのであるが、プレデワ Predewa, プンガカン Pengakan, バグース Bagus, プラサンギアン Prasangiang といったタイトル (称号) を持つ。歴史的経緯から、デワ・アグン Dewa Agung, チョコルダ Cokorda, アナック・アグン Anak Agung も用いられる。ほとんどのウェシャは、グスティと呼ばれる。スードラの場合、大半がそうであることから、バリ・ピアサ (Bali biasa 一般のバリ人) あるいはジャバ Jaba と呼ばれる。

インドの場合、『マナサラ』²⁸⁾ のように、北がブラーマナ、東がクシャトリア、南がウェシャ、西がスードラに振り分けられるのが基本であるが、果たしてどうか。

まず、ブラーマナの分布 (図2-7) で目立つのが北部である。そして、東部である。また、南の突出部の東北部にも目立つ。左京の南西、右京の中央部にも見られるが、北東部へのブラーマナの偏りは大きな意味をもっていると考えられる。北東の方角には聖山リンジャンがあり、チャクラヌガラ周辺のプラの分布や構成について報告(1)でみたように、オリエンテーションははっきりと意識されていると見ていいからである。個々の屋敷の東北角にもサンガ (屋敷神) が配されているのである。イ

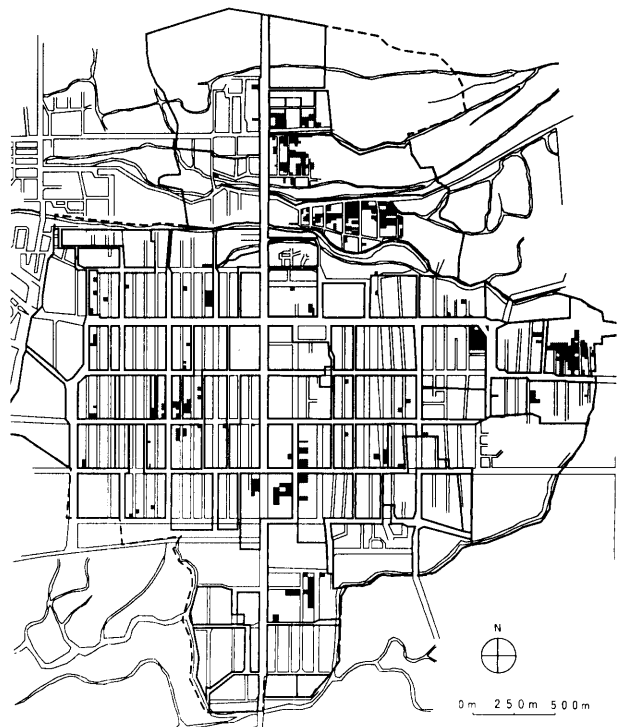


図2-7 ブラーマナの分布

インドそのものではなく、バリ・ヒンドゥーの方位観がそのまま持ち込まれていると見ていいだろう。

サトリア、ウェシャについては、称号ははっきり意識されているがカーストについては居住者の認識が極めて曖昧である。特にウェシャ意識が希薄である。グスティと合わせてウェシャと考えると全域に分布するが、どちらかというと左京の分布が厚い。それに対してクシャトリアと答えるものの分布は右京に厚い。称号ごとの分布を見ると、アグン、ラトゥといった王家にかかわる称号、またチョコルダあるいはデワは、数も限られ、左京の王宮の周辺に分布する。

以上のように、比較的数の多い、サトリア(図2-8)とグスティ(図2-9)には分布の偏りが見られる。サトリアは右京に、グスティは左京に偏っているといっている。グスティをウェシャと見なせば、インドとは逆であるが、カーストごとの住み分けははっきりしていたとみていいだろう。

スードラ、バリ・ピアサは全域にわたって分布する。ただ、当初は、次に出身地についてみるようにカーストごとに、また、称号ごとに、まとまって住み分けられていたことは間違いないところである。

カランごとの具体的な住み分け状況については紙数の関係でここでは省略したい。

2) 出身地とカラン

チャクラヌガラは、バリ島カランガセム王国の植民都市として18世紀前半に建設された経緯を持つ。バリからロンボク島への移民はどのように行われたのか、また、どのように住区が構成されたのかについては、出身地を聞くことで、ある程度推察できる。ヒアリング調査によれば、「各カランの名前は出身地のバリの集落の名前であり、各カランの居住者はその集落の出身者」ということであった。昭和17年発行陸地測量部作成のバリ島地図で、バリ島の地名の確認を行うと²⁹⁾、確認できたのは以下の13住区である(図2-10)。

1. Kebu, 2. Kebon, 3. Anggantelu, 4. Seraya, 5. Mantri, 6. Jasi, 7. Tohpati, 8. Manggis, 9. Sideman, 10. Sampalan, 11. Pande, 12. Selat, 13. Rendang

カランの名称は、バリ島の集落の名称からとられたということは、ほぼ間違いないと考えられる。また、集団で移住した人が、自分たちの出身地の名前を移住先の土地の名称とすることは、特に植民都市ではよく見られる事象である。

いつ、移民したのかを明らかにするために、プラ・メルの小祠を維持管理する住区の名前と、バリ島でも確認された13の住区名を比較した。その結果、プラ・メルに維持管理する小祠を持っているのは、Pande, Sampalan, Kebu, Rendang, Mantri, Serayaの6つであった。この6つのカランについては、チャクラヌガラ建設当初からチ

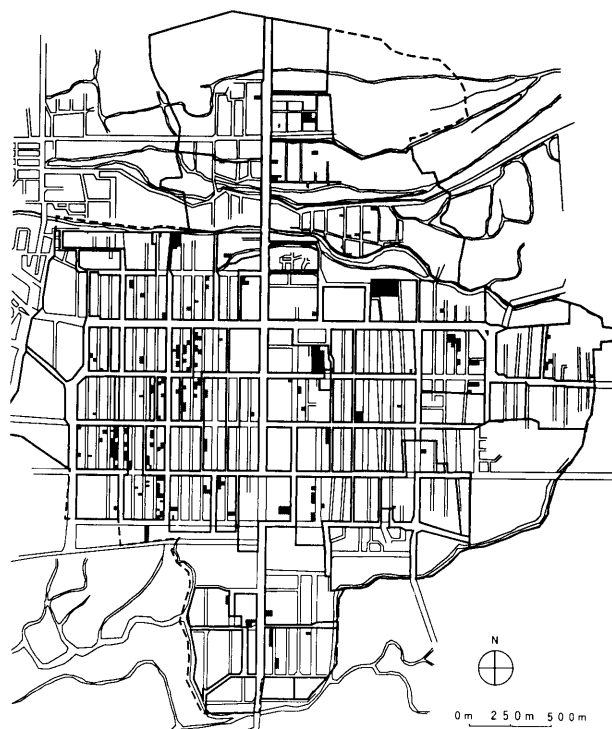


図2-8 サトリア居住区

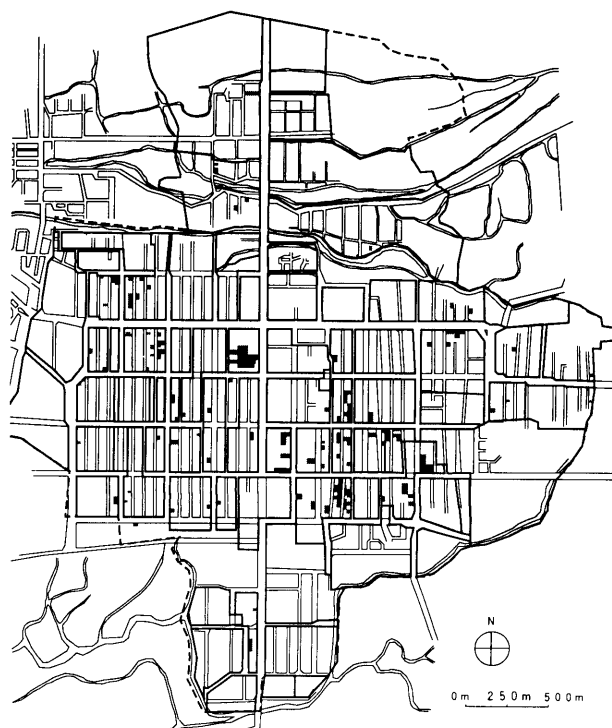


図2-9 グスティ居住区

ャクラヌガラに設立された住区であろうと考えられる。

2.2.4 居住空間の構成

具体的な空間構成を見てみよう。ヒンドゥー地区とイスラーム地区からそれぞれ2マルガを選定した。ヒンドゥー地区は右京のカラン・ジャシ、イスラーム地区は左京のカラン・スラヤである(図2-2)。

ヒンドゥー地区とイスラーム地区の空間構成の差は一目瞭然である。歩いていても、すぐさまその違いが分か

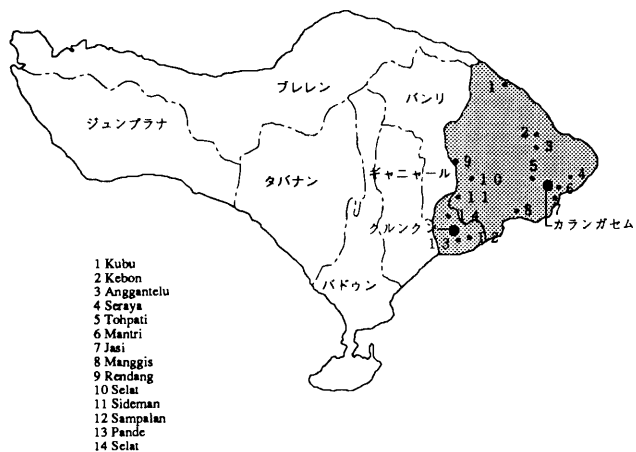


図 2-10 バリ移住元

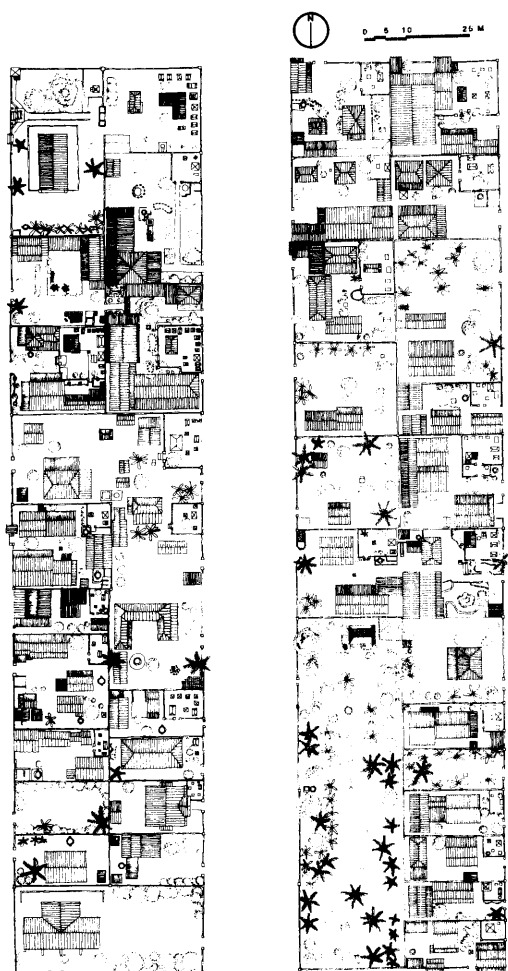


図 2-11 カラン・ジャシ配置図

るのである。ヒンドゥー地区は極めて整然としているのに対して、イスラーム地区に入ると雑然としてくる。街路は曲がり、細くなる。果ては袋小路になったりする。住宅もてんでん・ばらばらの向きに建てられる。空間構成とは別の次元であるが、イスラーム地区に入るとすぐさま取り囲まれる。居住密度は高く、コミュニティーの質も明らかに異なっている。

カラン・ジャシ（図 2-11）を見てみよう。カラン・ジャシの調査街区は、2 マルガからなり、36 戸ある。うち、ヒンドゥー教徒の住戸は、33 戸で、ブラーマナ 1 戸を除いて他はスードラ、バリ・ピアサである。他は、キリスト教の中国人が 1 戸、ムスリムのジャワ人が 2 戸ある。

ヒンドゥー教徒の住居の場合、北東の角にサンガを持つ。サンガは全体に統一感、秩序感を与えている。屋敷地は、必ずしもバリ・マジヤパイトの典型的構成をしているわけではない。敷地は様々に分割され、あるいは併合され、その構成は変化してきている。

イスラーム地区のカラン・スラヤ（図 2-12）は、もともと、きちんと街区割りがなされていたと思われる。なぜなら、北部には、整然としたヒンドゥー教徒の屋敷地が存在するからである。しかし、その街区割りは大きく変更されている。細い街路が自在に造られ、その街路に沿って住居群が建てられる。袋路も多い。塀で囲まれた屋敷地の中に分棟で配置するパターンと街路を延ばしていくパターンとは全く対比的なのである。

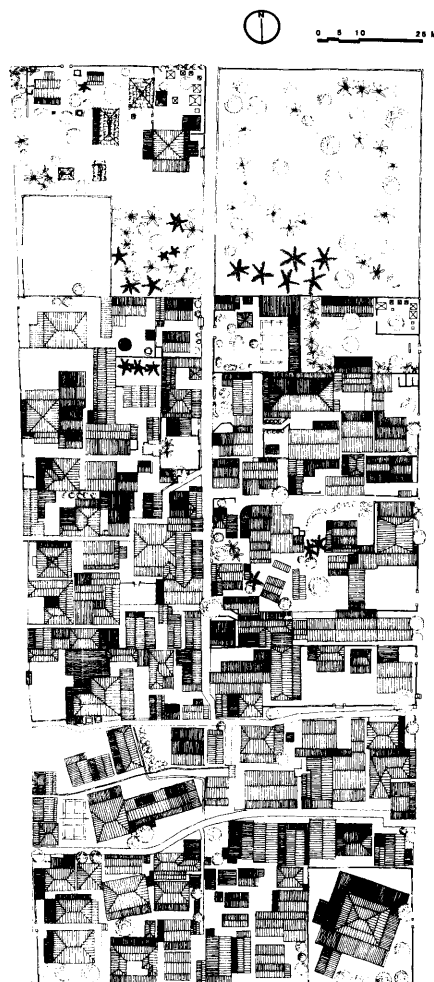


図 2-12 カラン・スラヤ配置図

2.3 チャクラヌガラの空間構造とコスモロジー

以上をもとに、大胆な仮説を含めて、チャクラヌガラの構成原理をまとめてみたい。考察の前提となるのは以上に明らかにした以下の点である。

①街区の計画は、明確な寸法計画を持ち、極めてシステマティックになされている。

②コミュニティの単位である住区の構成も、極めて理念的に計画されたものである。プラ・メルと祭祀集団としてのカランの結びつきは、都市構成の極めて基本的な原理として考えられる。

③バリのカランガセム王国の植民都市として、バリの都市計画（集落）理念が大きな原理となっている。

④王宮の構成は、基本的にバリのプリの構成と理念を等しくする。

⑤チャクラヌガラの配置は、周辺のプラの立地^{うかが}から窺えるように、リンジャニ山をメール山（須弥山）とするコスモロジカルな秩序のもとに行われている（報告(1)で見たように、プラ・リンサーは北東に置かれている。東に置かれているナルマダは、リンジャニ山とスガラ・アナック湖の写しである）。

まず、計画域を特定する必要がある。その設定次第によって構成原理についての読解は異なるおそれがある。

⑥計画域は、プラ・メルの小祠にかかわるプラの存在する範囲であると考えられる。その場合、東と南、北のグリッドから突出する区域をどう考えるかが問題となるが、少なくとも南の突出部は含まれていたと考えられる。また、どこまで、マルガ・ダサのグリッドで計画されていたのが問題となるが、パターンが崩れている左京の大部分は計画されていたと考えられる。

⑦右京については、マルガ・サンガの四つ辻の南に4×4のブロックが造られたこと、および北に1×4のブロックが計画されたことは、現在の街路パターンから、また、ヒンドゥー教徒の分布状況から明らかである。

⑧左京については、グリッドの区画が明確ではないが、ブロックの規模および現在の街路状況から、マルガ・ダサを特定できる。右京と左京の間には2マルガの緩衝区画（現在ショッピングセンターがあるクロダン地区）が設けられていた。道幅の広いマルガ・ダサによって区画されるブロックは、それから東に4×4ブロック想定できる。北1ブロックは、プリおよびプラ・マユラのブロックである。

⑨以上のブロックは、現在のヒンドゥー教徒の分布から、当初から計画されていたと考えてよい。ブロックパターンの崩れた左京にも古い屋敷地壁も残されており、出身地に関するヒヤリングからも計画域はおおよそ確認されている。

問題は、上下の突出部分である。

⑩プラ・メルの小祠にかかわるプラは、南部の突出部

分に存在する。また、ヒンドゥー教徒も南北の突出部分に居住している。とりわけ興味深いのがブラーマナの分布である。北と東にその分布は偏っている。要するに現在のヒンドゥー教徒の居住域は、その後の開発の度合いは別として、ほぼ当初から計画されていたと考えていいのではないか。

⑪バリの集落構成の原理の1つとして、カヤンガンティガの配置がある。プラ・プセ（起源の寺）、プラ・デサ（村の寺）、プラ・ダレム（死の寺）の3点セットのプラが南北に配置されるのである。チャクラヌガラを見ると、西の端にマルガ・サンガに接して、プラ・ダレムがある。また中央部にプラ・メルがある。さらに東の端にも、プラ・スウェタがある。南北と東西の違いはあるけれど、カヤンガンティガの理念はチャクラヌガラにも生かされていると考えられる。

⑫バリには、三界観念が広くみられる。宇宙の3層構造、山、平野、海というバリ島の3つの区分、集落スケールのカヤンガン・ティガ、屋敷地の区分（ナイン・スクエア^{からだ}）、屋根、柱・壁、基壇という区分……身体^{からだ}の頭、胴体、足の3区分に至るまで3層秩序が貫かれているという観念がある。チャクラヌガラの南北の突出部分も、頭、胴体、足という3層区分が行われていると考えていいのではないか。

もちろん、チャクラヌガラが新都市として更地に建設されたということではない。東の突出部には土着の集落があった。また、⑪の集落は先行して存在したと考えられている。少なくとも以上に重層する形で植民都市が計画され、建設されたのである。

3. ロンボクの都市・集落・住居の構成原理

3.1 ロンボク島のコスモロジー

ロンボク島のプラの構成とオリエンテーションについては報告(1)で述べた。チャクラヌガラの中央部に位置するプラ・メルは北の王宮とともにその中心的施設である。その名（メール山）のごとく、世界の象徴であり、ヒンドゥー教のブラフマ神、ヴィシュヌ神、シヴァ神に捧げられている。敷地構成は、東西方向に3つの部分に分けられ、それぞれ天・人・地に対応するといわれる。すなわち、スワ（Swah, ジャワ、バリ、ロンボクでマカラ Makara 以下同様）、ブア（Buah, ウカラ Ukara）、ブール（Bur, アカラ Akara）と呼ばれて区別される。スワには、33の小祠（pura）が置かれているが、それはチャクラヌガラの33のカランと関係づけられている。

ロンボク島における最も神聖なプラであるプラ・リンサーは、ヒンドゥーとイスラーム（ワクテウ・テル）の聖地が明確に隣接するという点において特徴的である。また、プラ・スラナディ、プラ・ナルマダなどの構成とオリエンテーションには、明確な秩序感覚をみることが

できる。

3.2 住居集落とコスモロジー

ロンボク島のササク族（ワクトゥ・テル）の住居集落は、3つの地域類型に分けらる。いずれにおいても、建築物が極めて単純に配される。伝統的住居も基本的に素朴な1室空間の建築物である。

配列は南部の集落のみ他と異なる。つまり他の地域では、建築物が平行に配置されるのに対し、南部では丘陵上に等高線に沿って配置される。それぞれ立地と関係している。南部には乾燥した丘陵地帯が多い。耕作地を少しでも多く獲得するために、丘陵上に集落を築かざるを得ない。他の地域の平野部やなだらかな傾斜地では、聖山であるリンジャニ山がオリエンテーションの中心となっているのである。

集落を構成する建築物の種類に焦点を当てると、北部諸集落が特異である。他の地域では住居と穀倉が集落の主な構成要素であるが、北部では住居とブルガによって構成され、穀倉は集落周縁部に配置されている。

バヤンではブルガはサカ・ウナムとも呼ばれる。バリにも同じ名で呼ばれる建築物がある。また、ブルガはバリに見られるバレ・バンジャールと同様の高床で壁のない建築物である。北部諸集落では、元来他の地域と同様、住居と穀倉とが素朴に平行に並べられていたのだが、バリの影響を受け入れると同時に、ブルガが移入され、現在見られるような配列が作り出されたのではないかと考えられる。

バリ人の住居集落を除くと、ロンボク島の住居集落とコスモロジーとの間には必ずしも強い関係をみることはできない。しかし以下の2点を指摘しうる。

①リンジャニ山を中心とした方位観が建築物の配列を大きく規定している。

②ペランダ空間であるサンコには、右・左、大・小、男・女といった双分観が反映している。ブルガと住居にも、男の空間・女の空間といった対応関係がみられる。

バリの住居集落との比較を通して、その特徴をまとめてみると以下ようになる。

知られるように、バリにおいては、住居集落とコスモロジーとの結びつきは密接である。ヒンドゥー教の影響を大きく受けたバリ・マジャパイトの住居集落はヒンドゥーの宇宙観の影響が特に顕著にみられる。バリ・マジャパイトの住居集落では、

①大宇宙のスワ、プワ、ブールといった3層構造が、集落、住居・屋敷地、ディテール等と関連づけられている。

②アグン山を中心とした方位観および日の昇沈に規定される方位観に従って、集落内の施設の配置や住居内の空間構成が決定される。

③男の空間・女の空間というように、建築物内部の空間構成が双分観に支配される。

といった関係を指摘することができる。

ロンボク島の住居集落は、ブルガの存在やアラン（穀倉）の釣り鐘型の形態など、バリの影響を受けたと考えられる点はいくつかある。しかし、以上のようなディテールに至る精緻な体系はない。バリとの関係という点では、むしろ、バリ・アガの住居集落の構成を規定する原理との近接性を指摘したい。

ヒンドゥー化以前のバリ人であるバリ・アガには、このような特徴はみることができない。ごく素朴な、双分観や山を中心とした方位観の影響を指摘できるのみである。

山を中心とするコスモロジーや住居への双分観の反映といった、ロンボク島の住居集落の構成を規定する原理は、極めて素朴である。おそらく、土着的な集落配置の原型をとどめていると見ていい。

3.3 都市・チャクラヌガラとコスモロジー

チャクラヌガラの都市構成原理については、2.2.3でまとめた。ここでは、インド、ジャワ、バリの都市と比較して、その特徴をまとめておこう。

チャクラヌガラと都市形態の面から最も類似している『マナサラ』に見える都市計画は「クブジャカ」と呼ばれるタイプの都市である。共通点としては、①全体構成が東西に長い長方形であること。②メインストリートが形成する四つ辻に面して王宮があること。③メインストリートの北側に1ブロックの居住地があること。④道路体系がグリッド・パターンであること。⑤東西8ブロックからなること、が挙げられる。また異なる点としては、①チャクラヌガラは、半八角形の部分を持たない。②王宮の位置がチャクラヌガラの場合、四つ辻の北東角である。③チャクラヌガラは、南北に5ブロックからなる。④チャクラヌガラには城壁がない、などが挙げられる。

全体構成としては、チャクラヌガラに似た構成を持っているが、いずれにせよ、『マナサラ』の都市理念がストレートに移入されたとは考えにくい。ヒンドゥーの都市理念がジャワ化され、さらにバリ化された上で、チャクラヌガラの構成理念は形成されたと考える方が自然であろう。

『ナガラ・クルタガマ』にみえる都市の都市理念の特質として2つのポイントが挙げられる³⁰⁾。1つは、四つ辻と王宮を中心とした都市構成である。また、市と広場を持つことも特質として挙げられる。2つめは都市の全体形を規定せず王宮との距離・方位との関係、すなわち都市形態全体を規定するのではなく、王宮との相対関係で都市を規定することである。

四つ辻と王宮を中心とした都市構成をしているという

点で、チャクラヌガラは『ナガラ・クルタガマ』に従っているといっている。ただ、都市の具体的形態は明らかでない。都市構成原理が『ナガラ・クルタガマ』に直接書かれているわけではない。

具体的な形態としては、バリの都市との関係が深いとみていいだろう。バリの都市（王都）の場合、①王宮は大通りが形成し、都市の中心を形成する四つ辻に面している。王宮の位置はバリの各都市によって異なっているが、北東角に位置する都市が一番多い。②市場はすべての都市で中心に近接する第1円に位置し、方位は各都市ごとに異なる。③墓地は各都市共、その次の第2円に位置する。方位は、タバナンでは西、クルンクンでは北東、バンリでは南、ヌガラでは南東、カラングセムでは南東というように規則性はない。④都市の全体構成に関しては、バリ都市においてもインド・ジャワと同様に入れ子状の都市構成であるということがいえる。すなわち、四つ辻を中心としてその周りを市場、プラが囲み、最外郭に墓地が位置するという構成である。⑤ギャニャールの一部、カラングセムの一部にはチャクラヌガラと同様の背割りされた宅地配置が見られる。⑥バリ都市には、城壁や壕等の都市の内と外を分ける施設はない。

チャクラヌガラの場合、①王宮の位置：四つ辻が都市の中心を形成し、四つ辻に面して王宮がある。また、王宮の位置もバリで最も多い南東角である。②市場の位置：四つ辻の北に位置し、王宮に接した第1円に属する。③墓地の位置：第2円に位置する。④都市の全体構成：王宮が中心に位置し、それを市場・寺院・墓地が取り囲んでいる、点は共通である。

以上のように、都市の全体構成を決定している理念としてまず考えられるのはインド→ジャワ→バリ→チャクラヌガラとつながるヒンドゥーの都市理念である。すなわち南北・東西に走る大通りが形成する四つ辻と王宮が都市の中心にある都市構成である。しかし、グリッド・パターンの都市は必ずしもバリには見られない。むしろ、街路パターンとしては、タクタガンを持つバリ・アガの集落（例えばブグブグ）のパターンが持ち込まれていると考えることができる。ブグブグは、道路体系は南北に走る大通りとそれに直交する路地から構成される。宅地の構成は南北の大通りに対して直交する路地によって長方形の住区が形成され、各住区は背割りされ、最大16筆、最小12筆の宅地に分割される。バリ・アガの集落には、バリ都市に見られないグリッド・パターンの道路体系が見られ、チャクラヌガラがバリの土着の集落パターンの強い影響を受けていることは間違いないところである。

もちろん、他の影響を考えてみることもできる。もし、古代インドの建築書に見られるグリッド・パターンが伝わったとするのなら、その伝達過程のジャワ、バリでなぜグリッド・パターンの都市計画がなされなかったのか

という問題がある。ジャワ化、バリ化が起こっているはずである。また、別の要素としてチャクラヌガラが植民都市であることがある。植民都市において格子状の都市計画が多く見られることは古今東西の事例の示すところである。さらに、中国の影響も考えられなくもない。そして、この当時、ジャワには既にオランダ人がきており、バタビアを建設している。グリッド・パターンが西洋の計画理念の影響を受けた可能性も高い。

イスラームとヒンドゥーとの住み分けの問題としてはインドの諸都市との比較が興味深い。最も興味深い都市として、例えば、ジャイプールがある。ジャイプールもチャクラヌガラと同様、18世紀に建設された計画都市である。同じように周辺部にムスリムが居住する。インド文化圏の東西の極がジャイプールとチャクラヌガラである。チャクラヌガラについては、さらに視野を広げた比較検討が必要である。

<注>

- 1) ロンボク島の住居集落の概要については、報告(1)で既示した。
- 2) 参照した文献は以下の通りである。
 - (1) F.Schulze : Pakerdjahan Prangdi Lombok, Albrechtand Rusche Batavia-solo,1894
 - (2) Team Penyusun Monografi Daerah Nusa Tenggara Barat : Monografi Daerah Nusa Tenggara Barat jilid. 1,2, Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, 1977
 - (3) Polak, Albert : Traditie en tweespalt in een Sasakse boerengemeenschap (Lombok, Indonesie), Proefschrift, Rijksuniversiteit Utrecht,1978
 - (4) Gunawan Alif, M. : Bangunan Tradisional Sasak Bagian dari Nasib Malang, asri 32 1985 : 43-5, 61-4 Dinas Pekerjaan Umum Propinsi Daerah Tingkat I Nusa Tenggara Barat : Bentuk Bangunan Tradisional Daerah Tingkat I Nusa Tenggara Barat,1981
 - (5) M.M.Billah : SOCIAL SURVEY South Lombok,1984
 - (6) Departemen Pendidikan dan Kebudayaan, Direktorat Jenderal Kebudayaan : Selintas Rumah Taradisional Sasak di Lombok, museum negeri nusa tenggara barat, 1987/1988
 - (7) Howe, L.E.A. : Hierarchy and Equality : Variations in Balinese Social Organization, Bijdragen tot de Taal-, Land-en Volkenkunde, 145 : 47-71,1989
 - (8) Ikatan Mahasiswa Arsitektur Fakultas Universitas Indonesia : Ekskursi Lombok, 1990
 - (9) Departemen Pendidikan dan Kebudayaan : STUDI TEKNIS PURA MERU CAKRANEGARA, Proyek Pelestarian/Pemanfaatan Peninggalan Sejarah Purbakala Nusa Tenggara Barat, 1990-1991
 - (10) Departemen Pendidikan dan Kebudayaan : Arsitektur Tradisional Daerah Nusa Tenggara Barat, 1991
 - (11) Judith L.Ecklund : Sasak Cultural Change, Ritual Change, and The Use of Ritualized Language, Universitas Gadjah Mada, 1992
- 3) このオリエンテーションの意識が住居の配置ばかりではなく寺院や聖地の構成における礼拝方向にもあらわれることは、報告(1)に述べている。
- 4) 祭祀集団の居住する区画をいう。

- 5) イスラーム化されているが土着の宗教的伝統も合わせ持つササック族をいう。それに対して、敬虔なムスリムをワクトゥ・リマという。報告(1)参照。
- 6) エル・テー Rukun Tetangga 隣組。インドネシアの最小近隣単位。
- 7) こういった空間分類は、南部の集落の、サンコに対しても行われる。サンコは、住居奥を背にして右側は「大きなサンコ sankoh besar」、左側は「小さなサンコ sankoh kecil」と呼ばれているのであるが、一般に大きなサンコは男の空間として、小さなサンコは女の空間として認識されている。接客空間として使用される時には、右のサンコで接待するのがよいとされ、左のサンコで接待を受けるのは歓迎されざる客と考えられている。
- 8) 調査対象としたのは、5つのブルガである。1993年12月22日の6時から20時までそれぞれのブルガで行われる行為を観察した。また1994年1月8日～9日と2日間にわたって6時から23時まで1時間おきに集落内の全ブルガを巡回し、ブルガにいる人の数とその行動について調査を行った。観察された行為を羅列すると以下になる。
- D……食材を置く／食材の調査／訪問者の接待／休憩／噛み煙草をはき捨てる／コーヒーを飲む／食器の片付け／食事の準備(えんどう豆を細かく切る)／談笑／寝る／おやつを食べる
- F……作業／行商がやってくる／サロン(腰布)を屋根裏に置く／休憩
- H……休憩／ニワトリを置く／鍋に水を汲む／談笑／作業／食器を置く／おやつを食べる／寝る／訪問者の接待／鍋を屋根裏に置く
- K……座る／おやつを食べる／コーヒーを飲む／読書／食事をする／赤ん坊が泣く／寝る／掃除
- U……寝る／冷や飯を鍋に入れる／食器を置く／にんにくの皮むき／水浴び用の用具を置く／食事をする／掃除／枕を屋根裏に片付ける／豆の皮むき／コーヒーを飲む／休憩／カードゲームをする／煙草を吸う
- 休憩(睡眠・談笑)、食事・炊事、物置、接待がブルガの主な機能ということになる。
- 9) Ide Bagus Alit氏、チャクラヌガラの長老(Pengusap)の存在による。マルガとは道のことでサンスクリットからきている。インドのジャイプールでもマルガは、通りの名およびコミュニティの単位として使われる。
- 10) バリ語にナワ・サンガ Nawa Sanga という言葉があり、中心と8つの方位を意味する。
- 11) 南北が JL.SLI Hasanudin、東西が JL.Selaparang
- 12) Lala Lukman氏(元教師)の教示による
- 13) Ide Bagus Alit氏による。*10 ibid.
- 14) P.Jelantic氏(元教師)の教示による。
- 15) tagtag とはバリ語で高さの水準、レベルのことである。
- 16) *13 ibid.
- 17) *15 ibid.
- 18) *10 ibid.
- 19) エル・ウエー Rukun Warga 町内会。インドネシアの行政単位。いくつかのRT(*6参照)からなる。チャクラヌガラの属しているマタラム市はアンペナン・マタラム・チャクラヌガラ3つのクチャマタン Kecamatan からなっている。そして、区にあたるクチャマタンの下位単位がクルラハン Kelurahan であり、チャクラヌガラは9つのクルラハンからなっている。クルラハンの下位の単位がRWである。
- 20) *10 ibid.
- 21) 吉田植吾：バリ島民，p.54 1992年 弘文堂
- 22) T.GH.Pigeaud: JAVA IN THE 14TH CENTURY, HAGUE, 1960
- 23) NAGARAKERTAGAMA, ジャワのマジャバイト王国の14世紀の年代記。ロンタル(椰子の葉)文書。
- 24) 報告(1)で触れたが、このプラは東西に延びるチャクラヌガラの主要道に面し、周囲は赤煉瓦の高い壁に囲まれて建っている。バリのカラングセム王国の王、アグン・マデ・ヌガラ Agung Made Ngurah によって、ロンボク島の当時のすべての小王国を統合する試みとして、1720年に建立された。ヒンドゥー教のブラフマ神、ヴィシュヌ神、シヴァ神に捧げられたものであり、敷地は、東西方向に3つの部分に分けられ、それぞれブル(Bhur地)、ブワ(Bwah人間)、スワ(Swah神)からなる。バリの三界概念と同一の概念であり、宇宙の構造を象徴している。
- ブルと呼ばれる一番西には門と丸太をくり貫いて造った鐘をもつバレ・クルクル Bale kulkul と呼ばれる見張り塔があり、中央に段差があり東側の方が高くなっている。そして敷地の中央にガジュマルの木(プリンギン beringin: ガジュマルの木は、バリでは神聖な木であるとされている。プラやプリをはじめ、カランの四つ辻に植えられている)がある。門の形式は、バリのプラに見られるチャンディー・ブンターと呼ばれる分割門である。中央のブワには参道を挟んで両側に建物とガジュマルの木がある。この建物は、バリの寺院の例から考えると、お供えの準備をしたり、ガムラン音楽を演奏したりするための建物であると考えられる。
- 25) 中央の塔は11層の屋根を持ち、シヴァ神を祭る。屋根はアラン・アランと呼ばれるチガヤで葺かれている。チガヤを固定するためには竹釘が使われている。構造材はナンカ Nunka、フタバガキ科のジャック・ウッドであり、細かい彫刻がなされている。その構造は、箱を積み重ねたような形式である。北側の塔は9層の屋根をもち、ヴィシュヌ神を祭る。この塔の屋根は瓦で葺かれている。南側の塔は7層の屋根を持ちブラフマ神を祭り、瓦葺きである。構造的には、シヴァ神の塔と同じである。
- 26) C.W.Cool: DE LOMBOK-EXPEDITIE, 1897 HAGUE. Trans.E.J.Taylor: With the Dutch in the East, London, P113-114, 1934
- 27) 注2-13 Alfons van der Kraan: Lombok: Conquest, Colonization and Underdevelopment, 1870-1940, Singapore, H.E.B., 1980.
- 28) 古代インドの建築書。古代ヒンドゥー教の理想都市については、シルバ・シャストラ(Silpa sastra)に描かれている。シルバ・シャストラとは、都市計画・建築・彫刻・絵画等を扱ったサンスクリット語の文書群のことである。最も完全なものは『マナサラ』(Manasara)であり、他に『マヤマタ』(Mayamata), 『カサヤパ』(Casyapa), 『ヴァユガナサ』(Vayghanasa), 『スチャラディカラ』(Scaladhicara), 『ヴィスバカラミヤ』(Viswacaramiya), 『サナテウチュマラ』(Sanatucumara), 『サラスバトゥヤム』(Saraswatyam), 『パンチャラトゥラム』(Pancharatram)の9種がある。『マヤマタ』の著者はマヤ(Maya)であると考えられている。マヤは最も評判の高い天文学書『スルヤシッタンタ』(Suryasiddhanta)の編者であると考えられている。内容は『マナサラ』と大差がない。『カサヤパ』は著者名が本の題名になっている。しかし、著者は人類の先祖の1人で大洪水の時に生き残った7聖人の第1に位置する人であり、神話上の人物である。『ヴァユガナサ』も著者名を書名に用いている。著者は「ヴァイナバ」(Vainava)僧団の創設者である。内容は建築的というよりむしろ宗教的である。『スチャラディカラ』の著者は「アガスタヤ」(Agastya)とされている。この本にしかない項目もあり、彫刻に関しては優れている。その他では『マナサラ』と大差ない。『ヴィスバカラミヤ』は内容的には『マヤマタ』に基づくものが多く、『マナサラ』に近い。『サナテウチュマラ』は、『ヴィスバカラミヤ』に基づくものであり、『マナサラ』の流れを汲むものである。したがって、シルバ・シャストラに関しては『マナサラ』を参照するのが最適である。『マナサラ・シルバ・シャストラ』(Manasara Silpa Sastra)という題名であるが、「マナ(manā)」は「寸法」(Measurement) また「サラ(sara)」

は「基準 (essence)」を意味し、「マナサラ (Manasara)」とは「寸法の基準 (Essence of Measurement)」の意味である。しかし『マナサラ』とはこの本の題名であると同時に、この本の作者の名前であるという説もある。また、「シルバ (Silpa)」とは規範、「シャストラ (Sastra)」とは科学という意味であり、「バストゥ (Vastu)」は建築という意味であり、「バストゥ・シャストラ (Vastu Sastra)」は「建築の科学 (Science of Architecture)」の意味である。したがって、本来的には、この本の題名は『マナサラ・バストゥ・シャストラ』(Manasara Vastu Sastra)であるべきであるとされる。成立年代はアチャルヤ(P.K.Acharya)によると、6世紀から7世紀にかけて南インドで書かれたものであると考えられているが、村田治郎²⁾は中に述べられている建物形態から近世に増補されたものであると考えている。

都市の形態と内部構成の詳細について述べている他のサンスクリット語の文書は『アルタ・シャストラ』(Artha sastra)である。これは理想的な首都についてもっと明確な考え方を示している。『アルタ・シャストラ』は富国について議論した文書である。著者は紀元前4世紀頃栄えたマウリヤ王朝、チャンドラグプタ1世(Chandragupta I)の首相であったと信じられている伝説上の英雄カウテリヤ(kautiliya)であると考えられている。この文書は紀元前2世紀から2世紀の間に編纂された。

- 29) チャクラヌガラはカランガセムの支配だけでなく、クルンクンの支配を受けた時期もあったので、カランガセム・クルンクン県の地名とチャクラヌガラの住区名との比較を行った。
- 30) ここでは詳細な分析は省略した。

<研究組織>

主査	布野 修司	京都大学工学部 助教授 地域生活空間計画
委員	応地 利明	京都大学東南アジア研究 センター 教授 地域環境学
〃	坂本 勉	慶応大学文学部 教授 イスラム社会史
〃	金坂 清則	大阪大学教養部 教授 都市・歴史地理学
〃	佐藤 浩司	国立民族学博物館 助手 建築人類学
〃	堀 直	甲南大学文学部 教授 中央アジア史
〃	Josef Prijotomo	スラバヤ工科大学 講師 建築史
〃	Sutrisno Murtiyoso	インドネシア建築史学会 建築史
〃	脇田 祥尚	島根県立短期大学 講師
〃	牧 紀男	京都大学大学院